

# 有明海における漁民の環境認識

—地名と流し網漁師の事例から—

藤永 豪<sup>1)</sup>

Fishermen's Environment Recognition on Ariake Sea  
-An Analysis of Place Names and Activity of Drift-net Fishermen-

Go FUJINAGA

## 要 旨

周知のように、有明海は日本最大といわれる干満の差や干潮時に出現する広大な干潟など、特徴的な自然環境を有する。その中で、ムツゴロウやワラスボ、エツ、ウミタケ、タイラギといった有明海特有の生物が生息している。有明海沿岸漁民はこうした特殊な自然環境において漁業を営み、重要な生活空間として活用してきた。その中で、干潟・浅海域におけるムツかけ、穴ジャコ釣り、ワラスボ搔き、ガタハゼ、スキ(スクイ)、押し網、待ち網漁、棚ジブ、沖合いでゲンシキ網等による流し網漁、アンコウ網等による敷網漁など、対象魚種にあわせた多様な漁法も生み出され、独自の漁撈文化が築かれてきた。本研究では、このような有明海における漁民の環境認識について、干潟や海域に付された地名と実際の漁撈活動(主として流し網漁)の分析をとおして、考察していく。

## I はじめに

農林業同様、漁業は経済活動であるとともに、文化的側面を持っている。すなわち、漁を行う上において、漁民たちは、潮流や海底地形などの漁場としての海域に関する知識と対象魚種の生態等、経験にもとづく独自の民俗的環境観を構築してきた。地理学においても、1970年代以降、この漁民の環境利用にもとづく認識を探る研究が蓄積されてきた。

たとえば、斉藤・関(1980)は、ヤマアテを事例として、漁民が海域において、どのような知覚空間を展開しているのかを明らかにした。また、堀(1980)、浅野(1984)は漁民が用いる通称地名を用いて、彼らが沿岸地形をどのように認識、

分類しているのかを解明した。田和(1981, 1983, 1988, 1990, 1992, 1994)の一連の研究は、漁場の利用形態について、漁撈活動の時間的・空間的分析を行った。榎谷(1985)も漁撈活動の時間地理学的考察を行っている。また、矢崎(2003)は、漁場認知について、複数の漁民集団による認識とその重層性を解明している。さらに、増淵(2004)は、一本釣り漁師の漁業日誌をもとに、漁場利用形態とその認識のあり方について詳細な検証を行っている。

以上のように、漁業の文化的側面についての研究は、少ないながらも徐々に蓄積されつつある(斉藤 1977)。本研究は、これを受けて、有明海における漁民の主体的環境認知について、地名と実際

1) 佐賀大学文化教育学部地域・生活文化講座

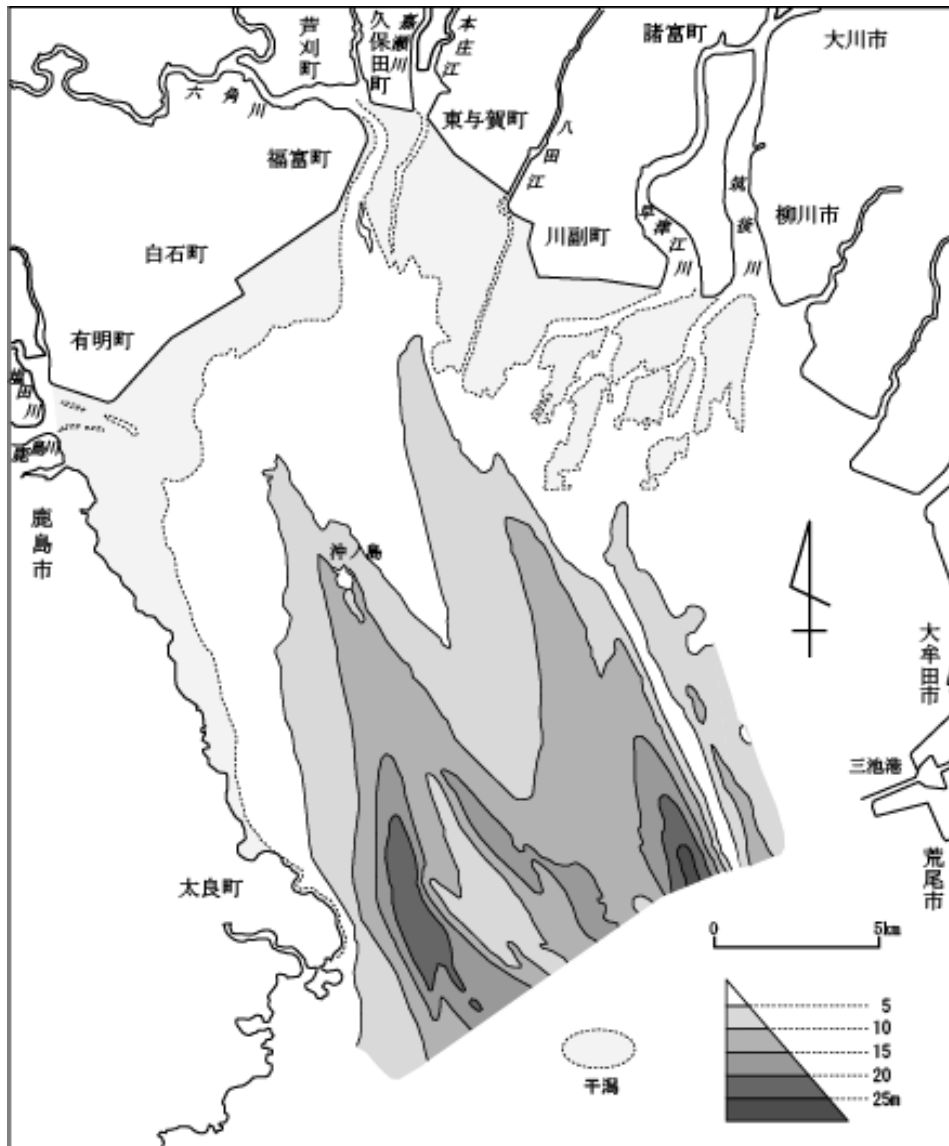


図1 有明海の水深と干潟の分布（佐賀県域）  
 （佐賀県水産局水産振興課（1992）をもとに作成）

の漁撈活動をとおして、その一端を明らかにしようとするものである。

## II 有明海の自然環境

図1に、佐賀県域を中心とした有明海の地勢の概要を示した。筑後川、早津江川、八田江、本庄江、嘉瀬川、六角川、塩田川、鹿島川をはじめ、主要河川の河口域を中心に、干潟が広がっている。有明海の干満の差は最大 6m、干潟は最大約 10,000ha にも及ぶ。有明海の水深は、全体的に浅

く、佐賀県域の最も深いところでも水深 25m前後と、遠浅の海になっている。その中において、南北に2本の海底水道が走る地形的特徴を有している。

こうした独特の自然環境は、ムツゴロウやワラスボ、エツ、ウミタケ、メカジャ（ミドリシヤミセンガイ）、モガイ（サルボウ）、タイラギなどの有明海特有の生物（水族資源）を育ててきた。漁民はこれらを基盤とした特徴的な漁法や技術、民俗的知識を構築してきた<sup>1)</sup>。

表1 有明海における主とする漁業種類別経営体数(2003年)

市町村・漁業地区	総数	小型底びき網	ひき回し網	その他の刺網	その他の敷網	その他のほえ網	釣り	その他の網漁業	潜水器漁業	採貝	その他漁業	海面養殖	
												かき類養殖	のり類養殖
(有明海区計)	1,409	128	4	190	24	3	11	18	5	19	47	8	952
千代田町	11	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	11
千代田	11	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	11
諸富町	75	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	74
諸富	75	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	74
川副町	378	-	-	18	4	-	-	-	-	1	2	-	353
大間	88	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	88
早津	34	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	34
南川	164	-	-	1	3	-	-	-	-	1	1	-	158
広江	92	-	-	17	1	-	-	-	-	-	1	-	73
東与賀町	104	-	-	11	2	-	-	-	-	-	12	-	79
東与賀	104	-	-	11	2	-	-	-	-	-	12	-	79
佐賀市	64	23	-	11	1	-	-	-	-	-	1	-	28
佐賀	64	23	-	11	1	-	-	-	-	-	1	-	28
久保田町	60	10	-	22	4	-	-	-	2	2	-	-	20
久保田	60	10	-	22	4	-	-	-	2	2	-	-	20
芦刈町	114	25	-	-	1	-	-	-	1	1	-	-	86
芦刈	114	25	-	-	1	-	-	-	1	1	-	-	86
江北町	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
江北	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
福富町	33	-	1	2	2	-	-	1	2	-	1	-	24
福富	33	-	1	2	2	-	-	1	2	-	1	-	24
白石町	40	5	-	5	2	-	-	-	-	-	-	-	28
白石	40	5	-	5	2	-	-	-	-	-	-	-	28
有明町	84	16	-	8	3	-	-	-	-	-	3	-	54
有明	84	16	-	8	3	-	-	-	-	-	3	-	54
塩田町	1	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...
塩田	1	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...
鹿島市	230	46	1	12	5	-	-	-	-	2	4	7	153
鹿島	44	1	-	-	2	-	-	-	-	-	1	-	40
鹿島浜	26	-	-	3	1	-	-	-	-	-	-	-	22
七浦	70	17	-	6	-	-	-	-	-	-	-	7	40
七浦	90	28	1	3	2	-	-	-	-	2	3	-	51
太良町	215	3	2	100	-	3	11	17	-	13	24	1	41
多良本部	33	3	-	8	-	-	1	-	-	2	1	-	18
太良中央	15	-	-	2	-	-	-	-	-	2	-	-	11
大浦	167	-	2	90	-	3	10	17	-	9	23	1	12

(漁業センサスをもとに作成)

### III 有明海における漁業の概観

表1に、2003年における佐賀県の漁業種類別の経営体数を示した。全体で1,409の漁業経営体が存在する。そのうち、およそ67.5%にあたる952の経営体がのり養殖を営んでおり、有明海の漁業におけるのり養殖への特化がみとれる。このほか、旧佐賀市や旧久保田町、旧芦刈町では小型底びき網漁、旧川副町や旧東与賀町、旧佐賀市、旧久保田町、太良町では、刺網漁が行われている。

有明海におけるのり養殖は、1960年代半ばから大きく拡大していく(図2)。2003年の有明海(佐賀県域)における海面漁業・養殖業の総生産量およそ5.5万tのうちのおよそ85.1%を、総生産額およそ15億円のうちおよそ92.5%をのり養殖が占める(山下2005)。

### IV 漁民の環境認識

現在では、のり養殖に大きく依存した有明海の

漁業であるが、かつては、ムツかけ、穴ジャコ釣り、ワラスボ搔き、ガタハゼ、スキ(スクイ)、押し網、待ち網漁、棚ジブなど、干潟・浅海域独特の伝統的漁が行われていた。また、沖合いでも、ゲンシキ網などによる流し網漁やアンコウ網などによる敷網漁が盛んであった。

このような多様な漁撈活動をとおして、漁民たちは、有明海についての独自の環境観や認識を生み出してきた。しかしながら、前述したようなのり養殖への著しい特化に加え、有明海の環境変化による漁業資源の減少、後継者不足等の問題から、伝統的な漁撈活動は衰退しつつある。と同時に、これまで漁民たちが創り上げてきた漁撈活動に関わる生活・民俗文化も消滅の危機にある。本章では、こうした有明海の漁業を取り巻く状況を鑑み、有明海を舞台に、これまで漁民たちがどのように有明海の環境を認識してきたのかを、地名と流し網漁師の漁撈活動を事例にみていく。

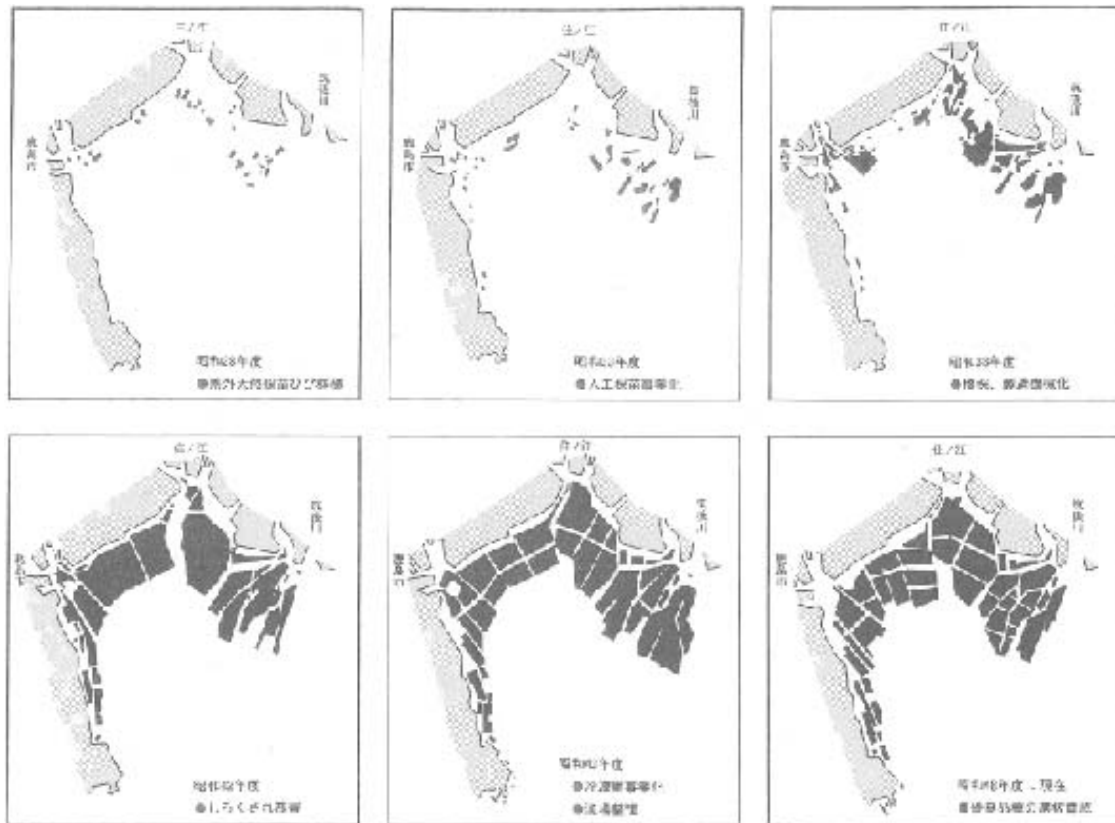


図2 有明海におけるのり養殖場の拡大 (1953～1992年)  
 (佐賀県水産局水産振興課(1992)を引用)

### 1. 有明海の通称地名から

筆者は、これまで農山村において、住民の認識する村落空間について、住民が用いる通称地名をもとに探ってきた(藤永 2000, 2004)。地名は単なる場所に付された名称ではなく、居住・生産・祭礼など、用途に応じて、空間を整理・区分した結果である(千葉 1999)。したがって、地名にはその場所の位置や方位、範囲、利用形態、所有・管理者といった情報が組み込まれている。地名は人間の空間に対する認識の表出であり、生活空間の具体的現れと解釈できる(Herman 1999)。海域における地名も同様である。

そこで、図3に、有明海に付された通称地名を示した。これらは、昭和40年頃に、当時の佐賀県有明水産試験場(現・佐賀県有明水産振興センター)の職員が、複数の漁民から採集した地名である。したがって、ある特定の漁民個人や社会集団によって認識された地名ではない。そのため、

これらの地名をもとに、漁民の認識体系を探ることは不可能だが、彼らが認識する有明海の大まかなあり方を知ることが出来る。

図3によると、地名は干潟域を中心に分布し、沖合いの水深の浅い部分にも付されている。これを見ると、湾東部と沖に、アミアライスやタカツ、ガンドウス、デンノツ、ニシノス、ミネノス、ノザキノスといった、語尾に「ス」あるいは「ツ」が付く地名が多くみられる。地元の漁師は「トゥ」と発音するようだが、この「ス」「ツ」は、干潮の際、干潟が出現する場所で、なかでも砂地を指している。漁民たちは引き潮で「ス」「ツ」が出現することを「トゥのでた」、「トゥのでく」と表現する。

また、湾奥から西部にかけて、フクドミガタ、ナナウラガタといった末尾に「ガタ」という語が付く場所がみられる。「ガタ」も引き潮の際に出現する干潟であるが、砂地ではなく、粒子の細かい

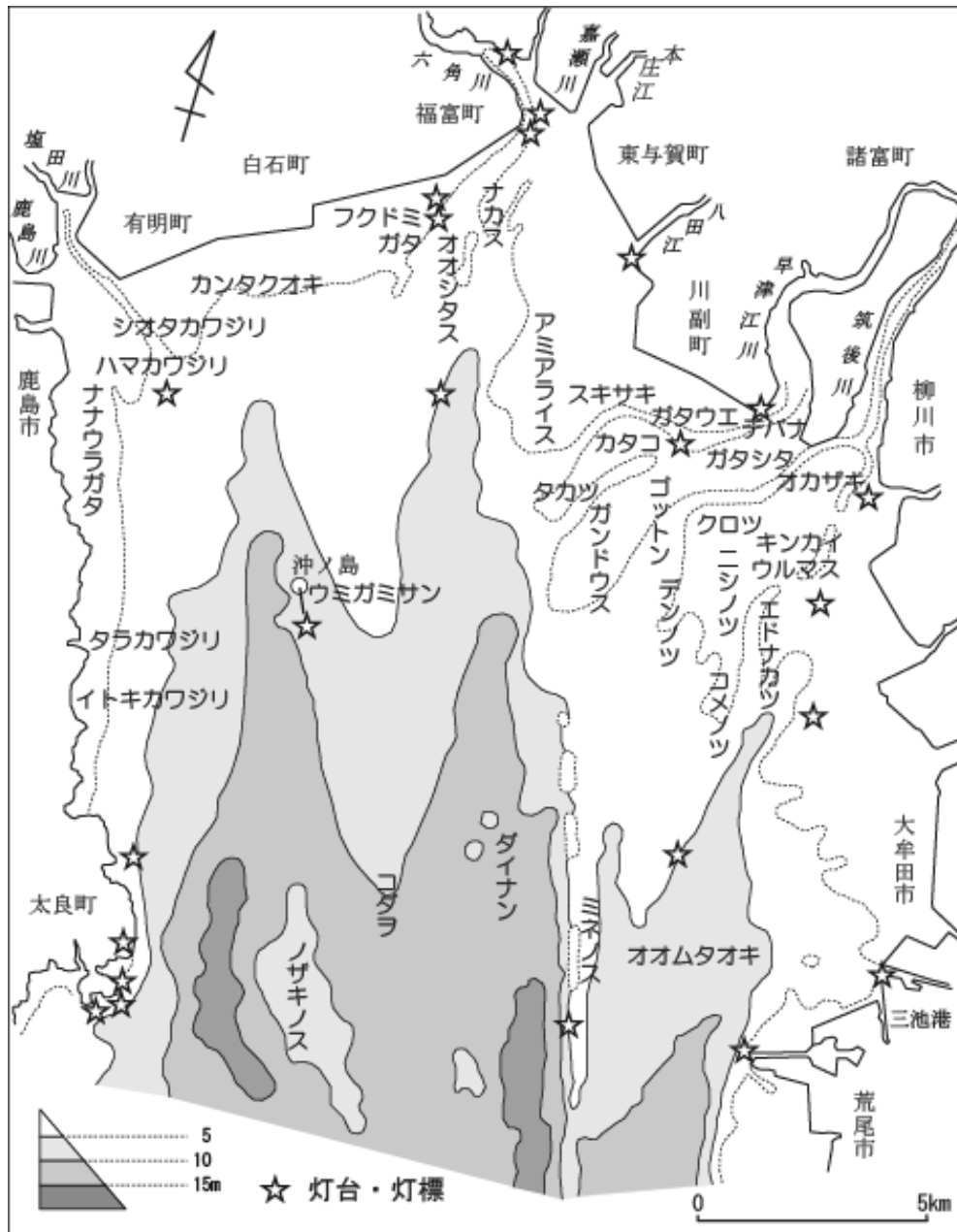


図3 有明海における通称地名（昭和40年頃）  
 （佐賀県有明水産振興センター資料をもとに作成）

泥土が広がる箇所を指しているようである。

最後に、湾東部の河口域にはシオタカワジリ、ハマカワジリ、タラカワジリ、イトキカワジリといった「カワジリ」という語尾をもつ地名がみられる。この「カワジリ」は河口から延びる干潟の境界を指すようである。

以上、大まかではあるが、通称地名から、漁民たちが有明海の環境を主体的に分類し、認識して

いることが理解できよう。

## 2. 流し網漁師の環境認識

本研究では、旧諸富町掬に居住する二人の漁師を対象に聞き取り調査を実施した。調査内容は、潮流や海底地形などの有明海の自然環境と漁場、漁法、活動時間帯と時期、対象魚種などの実際の漁撈活動についてである。なお、調査は2008年6

月2日から6日にかけて行った。

両漁師とも昭和2年生まれで、2008年6月現在、それぞれ81歳、82歳である。尋常高等小学校卒業後、すぐに漁業に従事するようになった。主に「ゲンシキ網」を使った沖合いでの流し網漁を行う専門漁家であった(図4)。数年前からすでに漁はやめており、息子が跡を継いでいる。ただし、現在では、のり養殖を主体とする漁家経営に移行している<sup>2)</sup>。

ゲンシキ網での対象魚種は、クルマエビ、マエビ(シバエビ)、トンキンエビ<sup>3)</sup>、ヒラ<sup>4)</sup>、スズキ、タイなどであった。図5にインフォーマントのうちの一漁家の昭和30年頃の生業カレンダーを示した。これによると、年間をとおしたクルマエビとマエビの漁を軸として、複数魚種の漁を組み合わせていることが分かる。ただし、ハダラ(サツ

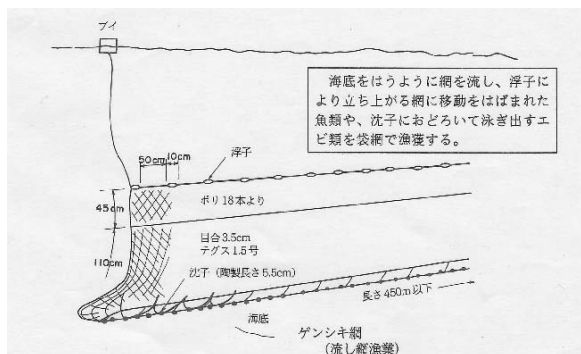


図4 ゲンシキ網

(佐賀県水産局水産振興課資料(1992)を引用)

パ)については、クルマエビの漁期が終わった11~12月の冬場に、数軒の漁家と共同で巻き網漁を行っていた。いずれにしても、事例漁家では、特定の魚種を対象に、年周性をもった漁業が営まれていた。

以下、聞き取り調査をもとに、実際の漁撈活動と有明海の環境との関わりについて述べていく。

**漁期と漁場** ここでは、事例漁家における漁の中心軸となったクルマエビ漁を例に、漁期と漁場について考察する(図6)。

クルマエビは浅瀬の砂地に産卵し、春先に孵化する。有明海沿岸では、この稚エビを狙って、4月から漁が始まる。稚えびは体長3~5cmほどで「シンコエビ」と呼ばれ、養殖用として取り引きされた。「シンコエビ」の漁は8月まで続いた。主な漁場は筑後川と早津江川河口に広がる砂地のシラカタやゴットン、クロツ、ミノテ、タカツといった「ス」・「ツ」である。

そして、10月半ばに「アオキタ」と呼ばれる強い北風が吹く頃、水温が下がり、成長したクルマエビは沖合いの深場に移動していく。そのため、漁場は、ミネノスやノザキノスなどの周辺へと移行する。

このように、漁師は漁における対象魚種の生態と海底地形の関わりを熟知し、対象魚種の移動と漁場の変化の目安を天候から把握するなど、生業と自然環境にまつわる様々な知識を有している。

また、ここで注意したい点は、有明海湾奥や東

対象魚種	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
クルマエビ				■	■	■	■	■	■	■		
マエビ (シバエビ)	■	■	■									■
トンキンエビ (サルエビ?)						■	■	■				
ヒラ												
タイ					■	■	■					
スズキ					■	■	■					
ハダラ											■	■

図5 事例漁家(流し網漁)の生業暦(昭和30年頃)

(聞き取り調査をもとに作成)

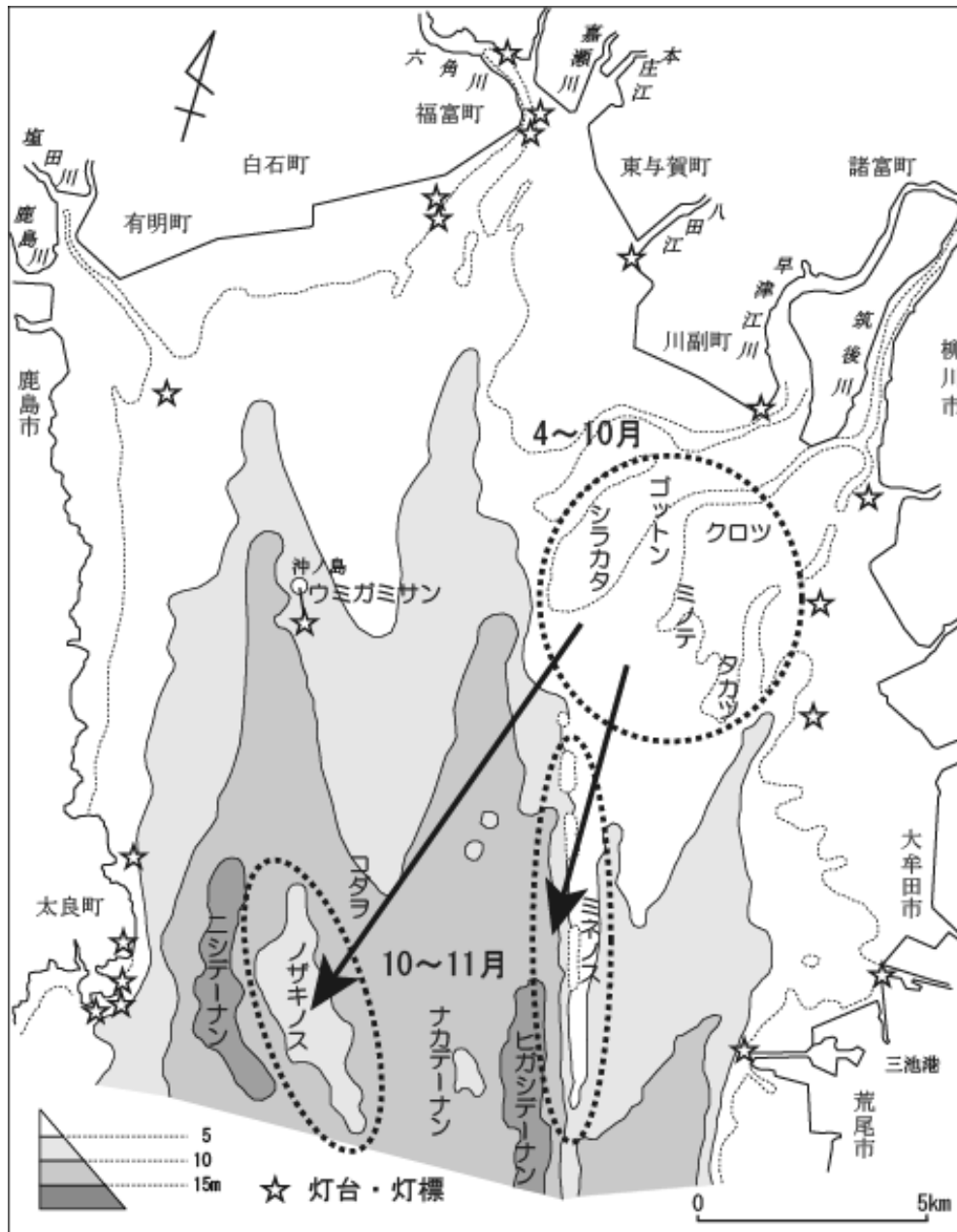


図6 事例漁家におけるクルマエビの漁場（昭和30年頃）  
 （佐賀県有明水産振興センター資料および聞き取り調査をもとに作成）

部のクルマエビ漁が行われない海域はあまり認識されていないことである。当然ながら、実際に活動する海域の認識が中心であり、対象魚種の分布範囲によって、言い換えれば、どのような魚種を対象とするかによって漁法と漁場は異なり、同じ有明海でも認識は異なるということになる。実際、インフォーマントは、図3にあるガンドウス周辺を「シラカタ」、デンノツ周辺を「ミノテ」という

ように異なる名称で認識している。

**潮の動きと漁** 続いて、潮流と漁の関係について考察する。

ゲンシキ網漁の出漁期間は、「シオドキ」と称される大潮<sup>5)</sup>を狙ったおよそ10日間である。ゲンシキ網は海底をほうのように流すため、潮の流れが大きな「シオドキ」に行われる。すなわち、有明海の流し網漁は、干満の差に起因する速い潮流を

利用して行われる。その際、自船からみて湾奥の方を「カミ」、湾口の方を「シモ」と称し、潮の満ち引きに乗って、「カミ」から「シモ」へ、「シモ」から「カミ」へと網を流していく。「シオドキ」(大潮)は一月に2回あるため、必然的に出漁は月に二回となり、漁は月周期性をもって行われる。この一月2回の「シオドキ」は、朔、すなわち、月が姿を現さない旧暦1日の「ヤミヨノシオ」と満月となる旧暦15日の「ツキヨノシオ」に分類され、漁撈活動は旧暦を基準に展開される。

また、漁は「タチモト」と呼ばれる満潮時に行われ、「ワイモト」と呼ばれる干潮時には休憩となる。特に、夜明けから満潮に向かう「アサミチ」と夕方から満潮に向かう「ユウミチ」は絶好の漁の時間帯となる。「シオドキ」には、海底の砂が巻き上げられ、クルマエビが警戒心を解き、よく獲れたという。漁師はこれを「潮が濁る」と表現する。そして、10月半ばに「アオキタ」が吹き、水温が下がり、クルマエビが深場に移動すると、「ユウミチ」が漁の中心となる。これは、深場では「潮が濁らない」ために、明るい「アサミチ」ではクルマエビが獲れないためであるという。もちろん、こうした漁における状況判断は、あくまで、漁師の経験にもとづくものであり、すべてが科学的根拠を持ち合わせているわけではない。しかしながら、結果として、「潮が濁った」時にクルマエビが獲れるのであり、むしろ、このような民俗的な知識と判断の中にこそ、漁民たちの環境観をうかがい知るための手がかりが存在するのである。

いずれにしても、有明海における流し網漁は、月と潮の動きに合わせた月周・日周活動であり、これを基本とした漁に関する知識が形成された。

**海底地形の把握** 干満の差が大きな浅海域である有明海において、水深と海底地形を把握することが重要である。

有明海では、水深と海底地形を把握するために、「スッテ」と呼ばれる縄を結んだ錘を利用した。海に「スッテ」を沈め、縄の長さで水深を測った。また、「スッテ」の感触で海底地形を推察した。場合によっては「スッテ」にグリスをぬり、海底土

を採取し、底質を把握した。これをもとに対象魚種にあわせた漁場の選定や位置の確認を行っていた。たとえば、クルマエビは砂地、「ガタツケ」のある場所はマエビというように「スッテ」を用いて漁場を決めていた。ある漁師は、『底に「ブルー」とヌカッたらガタ』というような表現をしている。ここから、漁民の感覚の中に埋め込まれた文化としての有明海の環境が垣間見える。

また、有明海ではその干満差ゆえに、漁船の航路にも特徴がある。漁民は、基本的に引き潮に乗って出港し、満ち潮に乗って帰港する。その際、利用されるのが、「タオ」と呼ばれる河川から海中に続く湊筋である(図7)。「タオ」は「エゴ」、「ミオ」とも称される。沿岸域には広大な干潟が広がり、水深が極端に浅いために、こうした海中に続く谷筋を航路として利用している<sup>6)</sup>。

さらに、河口には、航路の目印として、「ミヨーギ」と呼ばれる竹ざおが差し込まれている(写真1)。「出右、入左」といわれ、海に出る時は「ミヨーギ」を右に見て、帰ってくる時は左に見て船を走らせる(佐賀県教育庁社会教育課1962)。

こうした船の移動にも、潮の動き(干満)と地形に関する漁民たちの知恵が隠されている。



写真1 早津江川河口の「ミヨーギ」

(2008年6月5日筆者撮影)

**ヤマアテ** 山や灯台などを用いて、漁場や自分の位置を比定する。事例漁師は、雲仙岳や多良岳、天山、三池港などを目標としていたという。ただし、三方を陸に囲まれた有明海では、ほかに相当



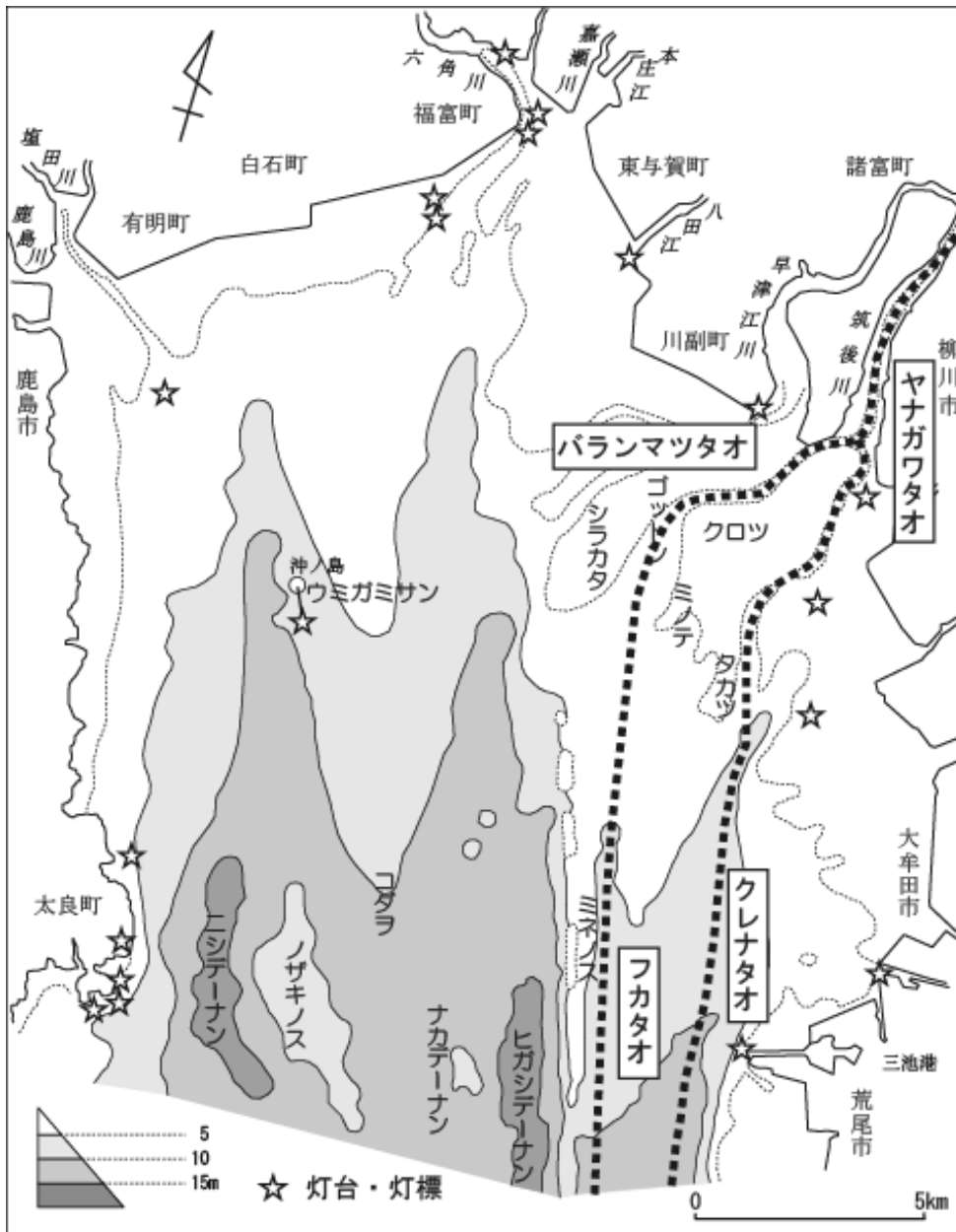


図7 事例漁師が利用していた「タオ」(昭和30年頃)  
 (佐賀県有明水産振興センター資料および聞き取り調査をもとに作成)

数のヤマアテに使用された目標物があり、今回の調査ではすべてを確認できていない。

## V おわりに

以上、漁民が用いる地名と漁撈活動の事例をとおして、有明海における漁民の環境認識について、若干の考察を行った。その結果、漁民は、潮流の動きや海底地形を熟知し、干満の差や干潟などに

みられる有明海の特徴的な自然環境を主体的に認識していることが明らかとなった。実際の漁撈活動では、漁民はこうした有明海の自然環境についての知識と経験をもとに、対象魚種や漁場、漁期、漁法を選択していた。また、航路としての「タオ」の利用など、浅海域としての有明海の特徴も漁民の行動や認識の中に表れていた。特に有明海の干満の差とこれに起因する激しい潮流がこうした漁

民の行動や彼らの環境認識と大きく関わっているものと考えられる。

加えて、事例漁師における湾奥・西部の認識が弱いことから、漁撈活動の範囲や対象魚種、漁法、所属する漁民集団等によって、同じ有明海でもその認識は異なると思われる。今後は、これらの点を念頭におきつつ、有明海における漁民の環境認識の多様性や重層性について分析していく必要がある。

### 謝辞

基礎資料の収集にあたっては、佐賀県有明海水産振興センターの職員の皆様に、現地調査では、旧諸富町搦の茂田利男様、野口清様にお世話になりました。末筆ながら、ここに記して御礼申し上げます。

なお、本稿は、「佐賀大学文化教育学部研究論文集」第13集第1号(2008)に掲載された論文を基に、査読により一部修正を行ったものである。

### 注

- 1) 武田ほか(1998)、中尾(1989)を参照。
- 2) 両漁家では、昭和30年代からのり養殖を開始したが、当初はあくまで副業であり、のりが経営の主軸となるのは昭和40年代以降である。
- 3) サルエビのことか？。
- 4) ニシン科の魚で成魚は体長50cmを超える。
- 5) 「シオドキ」は大潮そのものを指すのではなく、干満の差が大きく、潮流の動きが激しい時を指すようである。
- 6) 船が干潟や浅瀬に乗り上げて動けない状態を、漁師は、船が「スワル」と表現する。

### 参考文献

- 浅野久枝(1984)：東京都三宅島における地形を主とした民俗分類体系。地理学評論, 57, 519 - 536.
- 櫛谷圭司(1985)：時間地理学(Time-geography)の内房漁師の行動選択への応用。地理学評論, 58, 645 - 662.

斉藤 毅(1977)：水産地理学序説—水産現象の新たな地理学的認識体系を求めて。地理月報, 240, 1-4.

斉藤 毅・関 信夫(1980)：「山たて」にみられる環境と知覚空間。地理, 25 (11), 47 - 54.

佐賀県教育庁社会教育課(1962)：『佐賀県文化財調査報告書 第十一集 有明海の漁撈習俗』佐賀県教育委員会。

佐賀県水産局水産振興課(1992)：『沿岸漁場総合整備開発基礎調査報告書 沿岸海域環境マップ 基本図』佐賀県水産局水産振興課。

武田 淳・五十嵐勉・趙 慶萬・李 應喆(1998)：干潟の水産資源(第1報)有明海における伝統的採捕技術と多様性。佐賀大学農学部彙報, 83, 79 - 98.

田和正孝(1981)：越智諸島椋名における延縄漁業の漁場利用形態—水産地理学における生態学的研究の試み—。人文地理, 33 (4), 25 - 45.

田和正孝(1983)：水産地理学における生態学的研究の一試論—越智諸島椋名における一本釣魚の漁場利用の場合—。地理学評論, 56, 735 - 753.

田和正孝(1988)：沿岸漁業利用形態の諸相—和歌山県南部町南部におけるイセエビ刺網の事例—。関西学院史学, 22, 89 - 117.

田和正孝(1990)：仕切書による漁場利用形態の分析—和歌山県南部町南部の刺網漁—。関西学院史学, 23, 62 - 88.

田和正孝(1992)：マレー半島西海岸における沿岸漁業の漁場利用形態—ジョホール州パリジャワの事例—。人文地理, 44, 69 - 85.

田和正孝(1994)：ビーチとリーフの漁業活動—パプアニューギニア西州カタタイ村の生業的漁業と商業的漁業の一側面—。宮田 洋編『関西学院大学文学部60周年記念論文集』関西学院大学人文学会, 117 - 139.

千葉徳爾(1999)：『地名の民俗誌』古今書院。

中尾勘悟(1989)：『有明海の漁』葦書房。

藤永 豪(2000)：都市近郊山村における地名からみた住民の空間認識—佐賀県脊振村鳥羽院

- 下地区を事例として一. 地理学評論, 73A, 578-601.
- 藤永 豪 (2004) : 中山間地域における住民の環境利用と生活空間の変化—写真にみる景観の変遷をとおして一. 年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化 (神奈川県 21 世紀 COE プログラム研究推進会議), 2, 171-186.
- 堀 信行 (1980) : 奄 美諸島における現成サンゴ礁の微地形構成と民族分類. 人類科学, 32, 187 - 224.
- 増渕友美 (2004) : 一本釣り漁師の空間認識と漁場利用—北茨城市大津港を事例に一. 茨城地理, 5, 1 - 19.
- 矢崎真澄 (2003) : 沿岸漁民による漁場認知の重層性に関する研究—伊豆半島東南方「シマウチ (シマナカ)」海域の場合—. 地理学評論, 76, 101 - 115.
- 山下宗利 (2005) : 有明海におけるのり養殖協業化の進展. 佐賀大学有明海総合研究プロジェクト成果報告集, 1, 41 - 48.
- Herman, RDK. (1991) : The Aloha State: Place names and the anti-conquest of Hawai'i. *Ann. Assoc. Amer. Geogr.* 89, 76-102.